

思えばその日は朝から眠そうだった。
下睫毛のさらに下、陰りが眼窩を掘り下げて不穏なオーラを醸し出す。
顔面が見えなくとも微妙に丸まった背が憔悴をアピールする。

驚きなのは、寝不足そのものといった雰囲気を出すのが私ではなくかがみという点だ。

「さてはネトゲで徹夜？」
「……あんたと一緒にすな……今日を何の日だと思ってんのよ」

今日は5月28日。私の誕生日だ。
でも私の誕生日がかがみの寝不足起因となるわけもない。
よなべをして手袋編んでくれた、という線は希望として捨てがたいけれど、春真っ盛りうららか陽気に手袋はないだろう。

「今日は中間テスト最終日でしょうが」
「あー……直視したくない現実だネ」

かがみの隣で沈痛気に目を伏せるつかさも同意見のようだ。

「あんたらはきちんと試験勉強したんでしょうね」
『寝ました』

私とつかさの返答が八まる。

「普段は夜遅くまで起きてたいのに、なんで試験前に限って睡魔が襲ってくるんだらうね～」
「ほんとだね～私は普段もすぐ眠くなっちゃうけど、試験前は特に眠くなっちゃうよ」
「……………」

通学の道すがら、会話を交わす私たちを余所にかがみは突っ込みを入れることもなく、ただ車窓を眺めていた。

そんなに眠いなら乗り物に揺られている間くらい仮眠を取ればいいのに。
桔梗色の相貌は一種異様に輝いて、脇の私たちも流れる風景も通り過ぎて、試験範囲の数式と向かい合っているかのようだった。

「そうでしたか、かがみさんにしては珍しいですね」

教室へ足を踏み入れて開口一番、試験前のテンションから一人独立した優雅さで佇む親友にかがみの様子を報告すると、
彼女はボリューム豊かな桜色の髪をわずかに傾げた。
確かにかがみにしては珍しい。
いつもはガッチガチに練り上げた試験対策プランに実直さをもって従う人だ。
多少緩むことはあってもブレることはない。
ましてや隈を作るほどの完徹なんて、怠慢の証拠とばかりに扱うはず。

「今日はこなちゃんの誕生日なのに……帰りは遊びに行けるかな」
「そうですね、折角ですから私もご一緒したいのですが」
「あれ、二人とも覚えててくれたの」

当たり前でしょ？ とばかりに二人微笑む。
おめでとう、と言葉を添えて。
照れくさくてこそばゆい。
覚えててくれて、当たり前で予定を組んでいてくれたことが、
でも私の誕生日なんて別にして、試験終了日と来たらファミレス、カラオケのハシゴでフィーバーが鉄板でしょ。
鉄板になったのは、つかさとかがみとみゆきさんと仲良くなってからだ。
誰が欠けてもなんだか違う。

かがみが突っ込みを入れてくれないカラオケは、ちょっと物足りない。

「仕方ないなー今回はかがみを置いてぱーっとやりますか」

気持ちと裏腹、セリフは口から出た。
だって話が流れたら、かがみが後で気にするし。
今朝の様子じゃ、私の誕生日なんて考えてる暇なさそうだったしさ。
そんな深謀遠慮を知ってか知らずか、つかさとみゆきさんは顔を見合わせる。

お姉ちゃん（かがみさん）がいなきゃねえ……って感じで。

その次に揃って私を見る。

こなちゃん（泉さん）がねえ……って感じで。

私たちが付き合ってるからって、そんなに気を遣わなくてもいいんだけど。
誕生日は来年もあるし、今日のことを武器にしてしばらくはかがみをいじれる。
そう言って笑い飛ばしても、二人はすっきりしない表情。
かがみがいなきゃ我慢できないほど寂しいなんて、表にも裏にも心のどこにもないのに。

フォローを繰り返す間もなく、チャイムが響き渡り教室は往生際の悪い生徒たちの悲鳴で埋め尽くされた。

「かがみ様～帰ろうよ～」
「んあ」

様を付けるな！ というおなじみの突っ込みは口から出ない。

「つーか柎、すげー恰好だぞ」
「んー」

伸びをした途中で力尽きたんだろうか。
椅子に座ったまま背もたれに体重のほとんどを預け、後ろにのけ反って瞳を閉じている。
形のよい顎から喉に下る曲線も、くっきり浮いた鎖骨も、正午の日光に照らされてすっかり公衆の
面前に晒されている。
伝統的な表現をするところの『半ドン』は全校生徒に一種の高揚をもたらし、幸運にもかがみに目
を向ける人はいない。
みさきちがしつこく肩を揺らすうち、不承不承睫毛の端が開かれた。

「泉ちゃん、私たちは帰るから柎ちゃんをよろしくね」
「まかせたまへ～」
「見ちゃってごめんね」
「なにを？」
「あんなに無防備な柎ちゃん」
「うえ?!」

普段と同じスマイルでなんつー爆弾発言ぶちかましてくれちゃいますかこの人は！

「な、何言ってるのさ！」
「うふふ……面白くないって顔してた」
「嘘！ だーッツ！！」

峰岸さんにはレナ仕込みの威嚇なんて無駄らしい。
愉快そうな笑みは収まらず、逆に、うそじゃないよ、と内緒話みたいに耳に囁かれた。

『かわいいね、泉ちゃんは』
とかなんとか、見方によっては一種タラシっぽい余計な一言を添えて、
つかの間抗弁する言葉を失った私に、のそのそ鞆を持ってやってきたかがみが押しつけられる。

「おう、こなた」
「おうじゃないよ！ おうじゃ！」
「OH! KONATA!」
「英語の試験はさっき終わったヨ……」

なんで私が突っ込んでんの！ かがみ脳が寝てるでしょ！
八つ当たりしても半眼の寝ぼすけには暖簾に腕押しだ。
心なしか垂れたツインテがふらふら揺れている。

「帰ろ、かがみ」
「ん」

手をひかれるまま付いてくる姿は子供のようにかなり萌える。
けれど、このステータスじゃ遊びに出るのは無理そうだ。

「……今日なんの日か覚えてる？」
「ん」
「駄目だこいつ……早くなんとかしないと」

廊下にはすでにつかさのみゆきさんが待機していた。
私の説明を聞くまでもなく、かがみの様子を一目見て苦笑する。

「それでは予定通り、つかささんのお宅にお邪魔してよろしいですか」
「うん、ゆっくりして行ってね」

かがみがアレじゃカラオケは無理なので、試験明け祝い兼私の誕生祝いは柊家で執り行われること
となった。

あらかじめB組で取り決められた計画通りだ。
計画通り（ニヤッ）ってやりたいけど、突っ込みがないとつまらないからやらない。

「重いよ、かがみん」
「……………」

突っ込むどころか、帰りのバスの中は私に寄りかかって爆睡だった。
『重い』にすら反応しないってことはマジ寝だね。

「こなちゃんごめんね、場所代わるよ」
「あーだいじょぶだいじょぶ」

寝顔をうかがったら少しだけ顔色が悪くて、本当に一晩集中したんだとわかる。
白い額に長めの前髪がひと房かかって、すっと通った鼻まで落ちる。
起きてる時なら指でよける仕草がお馴染みで、『前髪切らないとなー』とつまんで引っ張って、
私はこっそり、キスする時顔にかかるさらさらする感触が好きなんだけどな、と思うのだ。
今は指どころか睫毛さえぴくりとも動かないから、代わりに私が髪をよけてあげた。
タイヤが小さな段差を蹴散らして、弾みであったかい重みがかかって私に乗りかかる。
かがみの柔らかさが制服越しに押しつけられる。
急に気恥しさが襲い車窓へ視線を移したら、寄り添ってる私たちの姿がガラスに反射していて余計
恥ずかしくなった。

「着替える」

私室へ帰りついて開口一番がこのセリフ。
すぱん、と気持ちよく鞆を投げ捨て、これまた気持ちよく制服を脱ぎ捨てる。
ぱさぱさ落ちる制服と次々露わになる肌に、突っ込みやからかいの言葉を探しているうち呆気なく
時間切れ。

ようやく私が

「かがみさあ、恥じらいがないとつまないよ」

と間に合わせの言葉を紡いだ頃には、着替えで乱れた董色の頭がスウェットから突き出ている。

「お昼ごはんできたら起こして」

顔だけ振り向いて勝手な、それでいて食欲旺盛なかがみらしい願いを託し、止める間もなくベッド
に倒れた。

もぞもぞ布団の下に潜り、手探りでリボンを解く。

「……えーっと、寝逃げ？」

今日は出遅れてばかりだ。

ベッドによじ登って顔を覗き込んだら、重いテンポで繰り返される寝息が急降下の睡眠を示す。
やっと一息つけましたって雰囲気でも緩められた眉を見たら、さすがの私も無理に起こせない。

「……ずるい……」

そんなに、教室で披露したより無防備な寝顔をここで繰り返すなんて、ずるい以外になんて文句を
言えばいいんだろう。

拗ねたような、でもずっとかがみの寝顔の傍にいたいような、そんな気持ちでベッドの上で座り込
んでいた。

「こなちゃん、お姉ちゃんどう？」

「オイオイオ！！」

ひ、柊家にノックという文化はないのかー！？

いやノックしてたかもしんないけど！ 私に聞こえなきゃ意味ないっていうか！

ていうかこんなに驚いてたら、まるで私がかがみにキスしそうになってた現場を押さえられたみたい
じゃん！

「いやキスとかそんなベタな展開じゃないですよ?!」

「あはは、こなちゃんそれ何の漫画のネタなの？」

「ネタじゃないよ！ 通じなかったなら忘れて！」

忙しく手を振ってベッドを揺らす自分の姿はきっとネタそのものに違いない。

弁解すれば余計な邪推を招くだけとようやく思っていたって口をつぐんだ。

まだ顔は熱いけど、気がついた事に無理矢理話題をシフトする。

「つかさはいつも通りだけど、なんでみゆきさんまで萌え萌え愛エブ姿なの？」

「はい、つかささんに可愛いエプロンを貸していただきまして」

「あんまり回答になってないよ」

「ゆきちゃんがお料理手伝ってくれるんだよ~」

「及ばずながらお力添えさせていただきます」

「そりゃかがみよりは断然戦力になるけどさー。なら私も手伝うよ」

進言に二人は顔を見合わせて、似た緩さで綿菓子みたいな微笑みを交わす。
どんな意味合いが含まれていたのか、教室での会話と違って今度はよくわからない。

「今日は泉さんが主賓なんですから、手伝っていただくわけにはいきませんよ」

「そうだよー、お昼ごはんができたら呼ぶからゆっくりしてね」

「えー！ かえって暇だよー」

口をへの字に曲げて、綿菓子コンビには通じない。
あらあらうふふと難なくかわされて、閉じられたドアの後には私と熟睡人間だけ。
急に沈黙が周囲を包む。

いつの間にか正座していた足を崩し、ついでに靴下を脱いで足を伸ばす。
かがみの隣に寝転がって全身をのけ反らしたら、音はしないまでも関節が喜びに軋んだ。
私もけっこうテストで疲れていたんだな。
昨日は1時に寝てしまったけれど、一週間前から試験勉強を始めた甲斐あって、今日はサイコロに頼
る事なく日程を終えた。
かがみがうるさく試験試験と連呼していたからだ。
人のことばっか気にしてるから、そんな切羽詰まるんだよ。

横を向いたら、中途半端にほどけたツインテール。
解いたりボンがまだ絡まっている。
ストレートっぽく見えて意外にボリューム豊かな髪質だから、一度付いた癖が抜けにくいのだ。
絡ませないように慎重にリボンを抜き出し、2本並べて枕の脇に避ける。
両サイドに盛られた癖を指で梳き、なんとか見られる格好に落ち着かせた。
壁を向いたかがみの表情は、寝転がった姿勢からじゃわからないけれど、中途半端に髪を束ねてい
るより寝やすいだろう。

「……一人で頑張らないでよ」

呟いた言葉に答えるのは、かすかに上下する肩。

「……置いてっちゃだよ？」

答えるのは疲れた背中。

ねえきっと、あなたは少し焦ってるよね。
私に発破をかけてる以上に自分を奮い立たせているよね。
法学部を目指した発端は知らないけれど、明確な目的とさせたのは私との関係だよな。
私だって、この関係の困難さは知っているつもり。
でも社会的地位とかそれ以上に、大切なのは二人の気持ちだと思う。
二人一緒にいられれば、一生パートだろうが平社員だろうがどうでもいい。
でも、かがみは違う。
全力で仕事に打ち込み、それが相応に評価される立場にありたい。
私とこうなる前から望んでいた事だ。
望みが増えて。
つまり関係が公になっても揺らがない立場を考慮し、回答は弁護士、あるいは類する法執務。
本気で私一人くらい養うつもりなんだ、この人。

馬鹿にされてるとは、思わない。

「心配性、なんだよね」

臆病なウサギちゃん、って、からかえたら楽だろう。
でも。

瞳を閉じて、仰向けになった。
耳をすませば、沈黙は沈黙じゃなくなる。
遠くに名も知らない鳥のさえずり。
神社の敷地に繁る木々に寄せられるのだろう。
戸内には、柵家の面々が織りなす賑やかな囁き。
きっとまつりお姉さんが中心となって、いのりお姉さんが突っ込んで、つかさがボケている。

お母さんとお父さんと、そして今はみゆきさんも一緒にここにこ見守っている。

不意に、自分はここにいちゃいけないんだって気持ちになる。
幸せだけど、幸せに浸りきれない気持ち。

それでも、私はこの涙が出そうに贅沢な憂鬱に対する特効薬を既に知っていた。

視界を伏せたまま布団に肩まで潜りこみ、隣で息する温かい質感へ寄り添う。

かがみの背中。
かがみの呼吸。
かがみの髪。
かがみの足。
かがみの体温。

かがみの存在。

ゆっくり息を吸って吐いて、かがみにくっついて。

そうしていると、私には他に世界があるんだと言い聞かせる半ば脅迫観念じみた逃避が溶けて消えていく。

他に世界なんかなくていい。
私はこの暖かさを選ぶ。
ここが、かがみの傍がいい。

臆病なウサギちゃん、って、からかえたら楽だろう。
でも、臆病なだけじゃなくてそうさせてるのは他でもない私で。

「.....やさしいよね.....ほんと」

私にはもったいないくらい。
まあ全世界がお前には過ぎた人だと責めても、決して誰にもあげないけれど。
そう、たとえ愛しの嫁の誕生日を忘れてたってね。
私のために頑張ってる私の誕生日を忘れるなんて本末転倒、すごい萌えポイントじゃん？

「.....かがみい.....もえ~.....」

嬉しくてかがみに全身で絡んでいるうちに寝入ってしまったらしい。
みゆきさんに起こされて驚きのあまり奇声をあげたけれど、かがみは已然睡魔くんに囚われたままだった。

私が、おなかいっぱいだなあ、と密かに息をついた時、横から取ってくれる。
食いしん坊とからかっても、なんのかんの食べてくれる。
自分が片付けるから好きな頼みなさいよ、と口に出さず了解させるシチュを作ってくれている。
考えてみたら、すごく甘やかしているよ。
お母さんみたいに。

「.....しかし今日は役立たずと言う他ないね」
「ご、ごめんね。こなちゃん.....お姉ちゃんも疲れてたんだよ」
「本当にかがみさんにしては珍しいですね」

別に怒ってませんヨ？
夕暮れに染まるかがみんベッドの傍ら、フォローが私を取り巻くけれど、別に拗ねてなんかないですヨ。

お昼から戻って、つかさの部屋でおしゃべりして、時計の針が6時を回ってもかがみは目覚めなかった。

最後に目にした体勢のまま少しも動いていないのは驚嘆に値する。

そりゃ誕生日だからといって、特別な何かを期待してたわけでもないけどさ、それはそれで、遊びに来た友達を差し置いてどうなの？っていうか、……あーなんか結局、私拗ねてるのかなあ。

「そんなうつけ者にはこうだああ！！」

「ウツケって何？」

「『うつけ』とはもともと、からっぽという意味であり、転じてぼんやりとした人物や暗愚な人物、常識にはずれた人物をさしまして、つまりは馬鹿という嘲りの意味になります……い、泉さん！それは油性マッキー！！」

「学生の友、最強汎用サインペンが火を吹くぜー！！」

かがみの白い頬に大きく『バカ』という二文字が記された。
カタカナなのは漢字で書く自信がなかったからだ。

「こ、こなちゃん！ マッキーは最強の油性だよ！」

「明日は休みだし問題ナシ！」

「そうでしたね、ほっとしました」

我ながらそれで終わるのもどうなの？って気もするが、みゆきさんも同意してるからいいや。

「さあて、気持ちよく報復が済んだところでお暇しますか」

パチンとキャップを閉める爽快さに気分良く宣言すると、つかさが残念そうに眉尻を下げた。

「明日は休みだから二人とも泊っていけばいいのに」

「んー私は帰ったらケーキ第二弾が待ってるからネー」

「私は明日朝から家族で外出予定がありまして、残念です……」

「そっかあ……じゃあ今度4人でお泊りしようね！」

「ええ、ぜひ」

「おけ！ 4人とあらば徹夜で桃鉄だあー！」

お前は友情を崩壊させる気か！ という怒声は落ちてこない。

本当に最後まで寝てたよこの人。

苛立ちは頬を張る代わりに油性ペンでぶつけたので、心にあるのはただ軽い呆れと慈しみだけ。

駅への道すがら、みゆきさんが不意に足を止めた。

「あら、タンポポですね」

目線の先を追うと、側溝を塞ぐコンクリの繋ぎ目から伸びた黄色い花。
タンポポからイメージする画像とは若干異なるずんぐりした茎に直線的な花弁が乗っている。

「日本タンポポってやつ？」

「在来種のうちでもトウカイタンポポと呼ばれる種です」

そよ風を思わせる上品な仕草で腰を曲げ、触れるか触れないかのささやかさで花弁を愛でた。
みゆきさんが興味を示すならいつまでも付き合っていてかまわないけれど、彼女はすぐに腰を伸ばし歩を進める。

「いいの？ 観察しなくて」

小走りで短い距離を詰めると、みゆきさんは心外そうに眼を瞬いた。

「さほど珍しいわけでもありませんし……自宅の庭にも生息していますよ」
「そこはじっくり我を忘れて観察するのが研究者キャラクオリティっていうか」
「そうですね……時間を忘れて観察したい気持ちもあります」
「我慢してるなら戻ろっか」

他意なく提案した言葉にみゆきさんは品良く笑った。

「泉さんと在来タンポポは通じるところがありますね」

「は？」

「じっくりと観察するのも良いですが……なんというか……そう、目にしただけで嬉しい気持ちになるんですよ」

「それって私が子供っぽいとかそういう意味？」

今度は声をあげて笑う。
そんなほのぼのした気持ちを与える存在ということと小動物か子供でしょ。
みゆきさんの愉快そうな笑い声からすると違うみたいだけど。

「正確に表すなら、かがみさんの事を考える泉さんですね」

会話のキャッチボールが止まった。
主に私が受け切れなかったため。
かがみの名前が出るだけで私の思考能力は2割出力ダウンする。
かがみと私の名前が並ぶと、その威力たるや6割に補正されるのだ。
なんなんだろうね、本当にもうこの御し難さはなんなんだろう。
“恋”の一言じゃあ納得できない気がするよ。
ほらね、と言わんばかりにみゆきさんの笑みが深まる。

「そこまで珍しくもありませんが、やはりセイヨウタンポポよりは希少です」

断言の真意は即理解とはいかない。
つまり私がデレてるのが希少って言ってるんだろうか。

「かがみさんが関わると、傍観している方まで幸せが伝播するような顔をされるんですよ。
喜怒哀楽全ての反応が幸せそうというか……可愛らしいです」
「それってやっぱ子供っぽいんじゃないん……」

また子供っぽいと思われたら癪だから、頬を膨らませるのは避けた。

「嫌ですか？」

「嫌だよ、ギャルゲの攻略キャラになったみたいで」

「泉さんは恋愛ゲームがお好きなのは？」

「攻略する側ならいいけど、される側は私のキャラじゃないもん」

「そうでしょうか。私はゲームについて明るくはありませんが」

「そうなの！ バイトで演じる分にはいいけど素じゃ無理」

「ですが、関係とは常に相対的なものではありませんか」

ギャルゲの主人公にとっては攻略キャラに過ぎずとも、逆から見れば主人公こそが攻略キャラなのではないか。

私にとっては自分が主人公で、でも他の人から見れば攻略キャラでもありうる。

「詭弁じゃない？」

「そうですね」

結局、その人間のキャラ付けは他の問題だ。
みゆきさんから、あるいは峰岸さんから見て私は攻略キャラっぽいという結論は変わらない。

「でも、やっぱり友達が幸せそうなら私も嬉しくなるんです」

みゆきさんが再び足を止めて、私は自分が足元の小石ばかり見つめていたのに気がついた。
顔を上げたら、言葉通り嬉しそうに微笑む親友の立ち絵と背景に鷹宮駅。
背後で甲高いブレーキ音とタイヤがアスファルトを磨る音が響いた。
灰色の路面にはきつと黒い筋が焼き付いた。
みゆきさんの笑みが柔らかに私と背後の光景を包む。

交わした関係は現実の前に危うくて。
視聴者の想像にお任せしますと済ませられるほど無責任ではいられなくて。

でも、だけど。

私が振り返ったら、かがみがいた。確かにいたんだ。
物語の主人公が決めのシーンで着てるにはどうなの？ な、近所のコンビニに行くのがギリギリな
部屋着で。
……それだって充分かわいい。細いウエストラインは緩やかなトップスでも隠せない。
だいすき。
だいすきなんだよ。
男好きしそうな頼りない肩幅や腰じゃない。ゼーゼー息をついて自転車に跨るあなたそのものが。

「かがみん……寝癖すごいヨ」

「え！ マジ？」

慌てて髪に手をやるけれど、真にやばいのは頬の落書きだ。

「ていうか！ なんで追いかけて来たのさー！？ 計画にない！！」

「お前の計画なんか知るか！」

「むー反抗的」

「お昼ごはんできたら起こしてって頼んだでしょうが！ 何勝手に帰ってるのよ！」

「何さ、嫁を放っという爆睡してたくせにさ」

「……う……すまんかった……」

嫁に突っ込みはないんだ……それはそれで困る。
つかの間落ちた沈黙が気まずくて視線を彷徨わせたら、みゆきさんが消えていた。

「ちょ！ みゆきさん?!」

数秒前まで傍らにいたピンク髪は鷹宮駅の入り口で爽やかに手を振っていた。
そりゃもう、口元から覗いた歯がキラリン光って画面四隅に花が咲いているくらい爽やかに。
つられて私も手を振り返す。

かがみも意味不明なまま同じように手を振っている。

二人して間抜け顔を並べているうち、みゆきさんは一礼を置き土産に構内へ消えていった。
ほどなく列車が駅へ入り走り去る。

「あれ、置いて行かれた？」

「……みたいね」

いやいや、みたいね、じゃないでしょ。
どう見てもあなたのせいでしょ、いらぬ気を遣われちゃったでしょう。

「卒業してから情報公開すればよかったかもネ……」

「私もたまに思うわ……」

憂鬱なような、面映ゆいような、複雑な表情は少し前まで私が浮かべていただろう顔で、事あるごとに友達から不意打ちされて困るのは、私だけじゃなくかがみも同じなんだと示していた。

「で、かがみん何の用？」

「な、なにって言うか……あんたが帰るから……」

「寂しくて焦って追いかけて来ちゃった？」

「だってあんた誕生日でしょうが！」

逆ギレしなくたっていいと思う。
そんな真っ赤になって怒鳴られたら、束ねないままバサバサ垂れ下がった髪と相まって必死さが伝わり過ぎて頬がにやける。

「あってるえー？ 覚えてたんだー？」

「覚えてるに決まってんでしょ！ ほら！」

自転車のカゴからプレゼントらしいラッピングが武骨に突き出された。

「手袋？」

「こんな春に誰が手袋編んで夜なべするか！」

「かがみんの萌え属性ならばもしや！」

「ねえよ！ てか萌えじゃなくてお母さん属性だろそれ！」

なんだろ。

すごい喋りやすい。

今までが喋りにくかったってわけじゃないのに。

かがみが突っ込むと、心が浮足立つ。

笑おうとわざわざ意識しなくても、瞳が細まる。

嬉しくて楽しくて落ち着かなくて、でもとても深く落ち着く。

なんなんだろね、コレ。

“恋”って一言で表すのは癪なくらいに幸せなんだよ。

「May I open the present？」

「Sure……って英語のテストは終わっただろ」

無視して包装をバリバリ解く。

邪魔な包み紙を勝手に自転車のカゴに突っ込み小さな箱を開封すると、手のひらに小さな金属が乗った。

「……………」

「……………なんか言いなさいよ……居た堪れないんだけど」

「……かがみん……意外に乙女だよね」

「ほっとけ！！」

私の手に乗ったのは、くるり無造作にくるまった華奢な金属だった。

ちょうど指に嵌まるくらいの。

銀環に小さな翠色が、小さく小さくささやかに埋め込まれたアクセサリー、平たく言えばリングだった。

「これさあ、どの指に合わせればいいのオ？ ねエ薬指？ 薬指？ 薬指なんだよねエ？」
「おまっっ……！ この場面でドヤ顔すんなよ！」
「ドヤ顔でも萌え～とか思ってるでしょー？」
「そりゃあんたはいつでもムカつくくらいかわ……じゃなくて！」
「じゃなくて？ かがみんが指に嵌めてくれるんじゃないのー？」
「……………」

最早真っ赤に染まり過ぎて自然発火しそうな手が私の手を乱暴に掴んだ。
痛いよ！ って文句を言いたい。
それでも左手の薬指に強引に押し込まれた金属は、嵌められた瞬間こそ擦れて痛かったものの、キツ過ぎとか全然なくて。

「おお、ぴったりじゃあ！ かがみんの計画通りィ？」
「悪役面すんな……」

呆れた表情は、いまだに赤い。
別に結婚指輪だとか重い契約ではなく、単に高校生のカップルが贈る他愛ない普通の恋人同士のリングだろうけど。
それをあえてアブノーマルな関係で贈ってしまう、贈りたかった心情を想う。

それって、かなり幸せ者じゃない？

「水性にしとけば良かった」
「？」

疑問符を宙へ生み出す釣り目を、交差点を監視する反射鏡の前まで手を引き連れ出した。

「……油性？」
「油性」

私の腹いせを目の当たりにして、かがみは驚愕と怒りと、自ら犯した所業に愕然としたような戸惑いを同時に表情へ浮かべた。
抱く罪悪感は同じくらいだと思うヨ……。
最強サインペン、かがみが擦ったくらいじゃビクともしない。

「まあ、明日休みで良かったわ……」
「だいじょぶ！ ほっぺに落書きされて気付かないかがみも萌えだよ！」
「そんな萌えで喜ぶのはお前とおじさんくらいだ……」
「ここでいつまでもへたりこんでるわけにもいかないし、どっか移動しようよ」
「加害者のくせに偉そうだな、あんたは」

ブツブツばやくかがみは、それでも間をおかず自転車のストッパーを蹴った。さすがにリアリストだ。

悪戯に直接怒らないのは、一重に罪悪感がゆえだろう。
ばっかばかしい、高校生じみた、つまんない普通基準の、恋人っぽい決まりごとに沿った、誕生日をないがしろにしてゴメンネ？ って感じの。
こんなチビでオタな私なんかさ、どの基準にも合わないんだから無視していいのに。
サドルの後ろに設えられた簡易座席に跨り、かがみの身体に腕を回す。

「どこ行く？」
「あんたんち、おじさん達が待ってるでしょうが」

そういえば誕生日パーティーが待ってるんだった。
ゆい姉さんもそろそろ仕事終わりだ。とすると、自転車で送ってもらえばちょうどいい時間。

「……送ってもらっても、えっちする余裕ないよ？ ゆい姉さんもゆーちゃんもお父さんもいるし」

私なりに真剣な忠告は、大きくよろけた車体で途切れた。

「しかも、顔におっきく『バカ』だし」
「送っていただけならいいわよ……誰に見られるわけなし」
「油性でも？」
「油性でも送ってく」

どこかやけくそ染みた宣言と同時に風が流れた。
鷹宮駅が、かがみのペダルを踏む力に従い、ぐんぐん後ろへ消える。
どこの誰のものとも知らない住宅や、在来種のタンポポ、目に映る景色が、かがみのペダルで流れて過ぎる。

それは何物にも止められない力だった。
回した腕から、躍動する筋肉の熱が伝わる。
私の短い腕でも余裕で包めるくらい細い身体だけれど。
誰にも止められない、かがみの生きている力だった。

「……二人乗りって青春っぽいよね、ジブリって感じ」
「そんな作られた青春はいらん」
「むーラマンがないなー」

つかさに付き合っただけで何度もジブリ映画見てるくせにさ。
さらさら、董色した髪が私を包むように流れる。
声が届きにくいから、疑問を張り上げる。

「このリング高かった？！」

三回ペダルが往復して答えが返る。

「今回の中間、首位だったらおこづかい前借りとチャラ！」
「首位って！？ みゆきさんに勝てるわけないじゃん！」
「やってみなきゃわかんないでしょーが！」

ダメだったら、いったい何カ月おこづかいナシになるんだか。
たぶん私の顔は、かがみの窮状と正反対だ。
何やってんのかな、リアリストでバイトもしてなくて“定期試験順位より平均評定”という実利重視な柊かがみ様が。

「かがみ様萌え～～！！！！」
「“様”言うなー！」

耳慣れた突っ込みが街角を突き抜ける。
私はスタッフロールに出演する攻略キャラよりずっとずっと幸せそうで。
ジブリのヒロインみたいにそっと、照れて熱くなった背に耳をすませた。

コメントフォーム

名前:

コメント:

投稿

良い話だけど... 『バカ』が...orz -- 名無しさん (2010-10-26 02:26:31)

かがみん、みゆきさんに勝てればいいね b b -- かがみん萌え (2010-10-24 09:27:50)

> 私はこっそり、キスする時顔にかかるさらさらする感触が好きなんだけどな、と思うのだ。

ニヤニヤがやばいです w w w w

最初から最後までこなたが可愛すぎ！

かがみラストでかっこよすぎ！

ニヤニヤで切なくて幸せで。。。最高のがこなたでした。GJ! -- 名無しさん (2010-09-21 23:57:53)

GJ!! -- 名無しさん (2010-07-11 19:58:21)

良い話だなあ！

話の組み立て方も好きです

かがみんの頑張る姿は萌える

そんなかがみの嫁とは、こなたは幸せ者だなあ -- 名無しさん (2010-06-28 15:20:20)

あーもう最近涙腺が緩いんだからこういうイイハナシはきついよねえ...ぼろぼろ涙が止まりませんって

-- こなかがは正義ッ！ (2010-06-28 12:40:12)

読んでてすごく暖かい気持ちになれる S S に久しぶりに出会えました。

作者様ありがとう！ G J !! -- kk (2010-06-27 23:53:07)

投票ボタン (web拍手の感覚でご利用ください)

投票(15)